

治療記

福元勝巳氏



「何とかしなければっ!」

鶴見先生に直接お会いしたのは昨年12月半ば。しかし私たちはもともとずっと以前から先生にご縁を頂いていたように思います。

3年前、弊社の社員が肺癌ステージ4と宣告され抗がん剤投与で通院加療。元気になったかと思いきや、また悪化。一向に回復傾向の見られない姿に『何とかならないのか? 私たちでできる精一杯をしてさしあげたい。』この一途な思いで癌の関連書物を読み漁りました。その中で、鶴見先生の本にめぐりあいました。今の西洋医学での癌治療は元気な細胞までをも破壊し、さらに強い癌細胞に豹変する危険性を備えている。食養生こそが身体の根幹から治療するものであり、免疫力を高めることが病に打ち勝つ唯一の手段だと。まさに目からウロコと同時に希望の光を見た気が致しました。

抗がん剤治療で日に日に憔悴してゆく彼の姿は気の毒で、副作用の酷さは言葉にならない程で、髪は抜け落ち、味覚、聴覚障害もおこり、手の節々はこわばり、顔色は悲憤で胸が張り裂けそうでした。何とか鶴見先生のクリニックの門戸を叩

いてもらいたいとその思いで考えつく限りの手助けをさせて頂きました。けれど彼は先生とのご縁を頂くこともないまま旅立ってしまいました。また、手術や抗がん剤治療を続けている何人かの知人の闘病の姿を見せてもらっている中で、私たちは本能的に対処的な治療方法では癌は治らないことを自然と認識していたのだと思います。まさかこれらの経験が、今回の癌闘病のものになるとは思いもしませんでした。

昨年6月、腹部わき腹に激痛が走り緊急で検査入院。結果胆嚢炎で手術が必要と診断されました。本来なら直ぐにでも手術をとなりますが、心臓の基礎疾患をかかえている為、かかりつけの病院で治療するしかありませんでした。病院を移り、一から検査のやり直し。検査ばかりが続く毎日と、仕事でも大きなストレスを抱えるという悪条件が重なり、胆嚢の腫瘍は待ったなしにどんどん大きくなっていったのです。

そして腹腔鏡での胆嚢切除は緊急入院からすでに4カ月も経っていました。これで安心と思っていた術後の診察で、摘出した胆嚢の細胞片が

